
～ 祈り ～ みちたりない幸せ

美伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祈り〜 みちたらない幸せ

【Nコード】

N1126E

【作者名】

美伊

【あらすじ】

人並みな生活を送ってきたはずの私だったが、歳を重ねていく自分が女として、そして一人の人間として、本当に幸せだったのか不安と疑問でいつしか胸が一杯になっていく。淡々とした日々の中、様々な葛藤の中で本当の愛情とは何か、本当の幸せとは何か、予想もしなかった新しい恋の訪れとともに模索していく。

ブローグ

何気ない幸せをふと感じる瞬間もある。それでも、哀しみに満ち溢れた日常が幾日も幾日も続いた後に、ふと感じ入ることがある。満ちたりた幸せなどこの世にあるのだろうか。

そして、一つの決意を導くまでに、ずっと考えてきたことがある。途轍もなく深く、大きく、私の心を揺らし続けてきた単純な疑問。幸せとは何か―

新しい夜明け

心に沁み入る様に静かな波音を立てる暗い海の上で、夏の星座に囲まれた故郷の空は、まるで静けさを埋め尽くすかの様に夜の静寂の中で密かに輝いていた。岬の灯台から零れる何とも妖しげな光が、何度も何度も暗い海の上をぼんやりと照らしては遠のき、照らしては遠のき。

潮の香漂う古びたホテルの窓から、そんな細く単調な景色を、云い様もない悲しみと絶望に埋もれながら、私は一人しんみりで見飽きる事なく時を忘れて随分と長い間見入っていた。

真夜中の静かな岬にひっそりと建つ古びた観光ホテルの一室で、寝付けない私を尻目に彼は大きな寝息、そして時折耳に障る轟音とでも言うべき鼾を立てながら赤ら顔で寝入っている。半分開口した口元からは酒気を帯びたアルコール臭が漂い、隣の布団で寝付けず横たわっている私に言い様もなく不愉快な感覚と共に絶望、復讐、いや違う。それはむしろ幸せになりたいという欲望の様なものだったのかもしれない。私の心を出会った時からいつも掻き回してきた彼に対するそんな様々な感情が入り乱れ、居ても立つてもいられなくなり、布団から身を起こしては横になり、身を起しては横になるのを繰り返しているうちに、ついには寝るのを諦めて窓際に置いてあった冷たい革張りの古めかしいソファーに、ドンと身を投げおろしたまま、いつまでもぼんやりと窓から見える故郷の夜の風景を眺める運びに至った訳で、気だるい身体と重たい頭を抱えながら、これから続くであろう淡々とした夫婦生活について、あれこれあれこれと考えているうちに時計の針はすでに深夜を回ろうとしていた。

ここ数年というものの、私は夫と肌を合わせる事も無く、ただの同居人のように同じ屋根の下で過ごしてきた。残っているはずもない

ないであろう愛情をほんの少し取り戻し、何とか同居生活が続く様にと、私は重い決心の元、この旅行の企画をするに至った。これがある意味、私の中では最後のチャンスでもあった。最後のチャンスに与えられた最後の夜がもうすっかり更けて、数時間後には朝を迎える事になるだろう。仕事がある夫は、私と子供達を残して明日にはもう帰宅してしまうのだ。

子供が出来てからというもの、もう随分と長い間夫の体に触れる事もなく冷めきった夫婦生活が続いていた。正直に話せば、体を求めてこなくなった夫に私はもうすっかりと愛情を感じなくなっていた。むしろ、私に対する扱いが、あまりにも粗雑になってきた夫に對し内心腹を立てていた。

私は一体何の為にこの男と結婚したのだろうか。今の私は、幸せでいっぱいだったあの頃の彼の形がもう何処にも残っていないのを、ひしひしと感じてさえた。

彼と一緒にいるだけで、彼の傍にいただけで、あの頃の私は本当に幸せだった。セックスが無くなった事も愛情が薄れた要因の一つだとすれば、もしかしてその機会を彼に与える事で、あの頃二人の間に通い合っていた愛情を少しは取り戻せるのかもしれない。そうすれば少しはあの頃感じていた様な幸せの感覚が甦ってくるのではないか。そう何度も考えてはそれとなくそんな機会を彼に与えてきたつもりだった。でもそんな夜は決まって絶望感に覆われ、悔しさの様な、何とも言いようもないみちたりない思いで胸がいっぱいになり、明け方まで涙の止まらない夜が続いた。

彼は大きな寝返りを何度も何度もうちながら、冷たく大きな背中を向けては、いつも諦めのような感覚を私に与え続けてきた。今夜の彼は酒に酔って泥酔している。そしていつもになく大きな大きな諦めを私の感覚の中に痛いほど埋め込んでいく。

愛情を感じないからセックスを求めないのか、セックスがないから愛情を感じなくなったのか、愛情がなくなれば幸せもなくなるのか、幸せとは一体何なのか、どうして幸せというものは求めても求

めてもみちたりないのだろうか。そんな考えが私の頭の中をグルグルグルグルとまるで音を立てるかの様に回り続け、私の心をつもになく暗く憂鬱な感情でいっぱいにしていた。

それから長い長い時間が流れ、夜明けは既に近付こうとしていた。しかしその夜明けの持つ意味はこれまで幾度となく重ねてきた眠れない夜の後に迎えた夜明けとは大きく違っていた。私は何かが違う方向へ向かい始める予感のようなものを一人漠然と感じながら、諦めや絶望を何とか希望へと変え、自分をこの先幸せへと導く他の方法についてすでに模索し始めていた。

うつすらと夜明けの光が部屋に射し込み始めたころ、疲れた頭にクラクラと何かがもたげてきて、意識を失う様に遅くて深い眠りがようやく私の体を支配しはじめていた。

幸せのかたち

「おい。早く起きて準備しないと、いつもお前が一番時間かかるんだからな。」

耳の奥の方から、聞き慣れた不愉快なトーンで朦朧とした意識を呼び覚ますかの様に彼の声が響いてきた。夜明けの訪れから3時間ほど経っていたのだろうか。閉眼したまま、朝の日差しが部屋の中を既に煌々と照らし始めているのを微かに感じていた。

眠たさと気だるさが、私の目覚めの感覚の大半を占めていてすぐに起き上がれないのではなく、むしろ彼に対する反発心の様なものが胸の内にムクムクと湧き上がってきて開眼する事を私の体が拒否しているようだ。

目を閉じたまま頭だけが段々と目覚めを迎えてきて、彼が煙草を吹かす大きな吐息の様な音が聞こえてきたと思った次の瞬間、窓辺から流れてきたと思われるすがすがしく新鮮なはずの朝のそよ風につて、それを打ち消す煙草のなんとも煙たく悶々とした嫌な香りが部屋中に立ち込めてきた。

それは、まるで希望を打ち消した昨夜と同じ、とても不愉快な感覚だった。

「ほんとに昔からよく寝る奴だなあ。」
ん？

寝たふりを続けている私に彼の表情までは見て取れないが、なぜだかその語尾に優しい笑いの様なものを感じた。

まただ。私がこんなに不愉快な感覚を抱えて一晚寝れずに過ごしたというのに、彼は全くそんな私の感情に感づく事もなく一晩ぐっすりと眠りにつき、楽しい旅行を満喫しているに違いない。私の感情や感覚など全く気に掛ける事もなく、そしてそんな必要を感じる事もなくこれまでの様に平然と日々を過ごしている。そしてきつと

そんな彼のスタイルは、これまでも、そしてきつとこれからも変わる事無くこの先ずっと続いていくに違いない。

いつものような憂鬱な感覚が私の心に入り込んできて、その事実を確認する為に、彼の表情を薄眼を開けて確認した。

真つ暗だった海は夏色の朝日を浴びてすっかりと鮮やかなブルーに変わっていた。窓から見えるそんな景色を眺めながら彼はいつもになく穏やかで、疲れを吹き飛ばした様な、スツキリとした顔をしていた。

一晩眠れず頭がなんだかぼんやりとしていて、一体自分が何に対して鬱々としていたのかさえハッキリと思いつけないほどだ。

「さあ、朝風呂にでも入るとするか」

彼は、すがすがしい表情で、さっそうと入浴の準備を済ませ、あつという間に入浴用のタオルを小脇に抱え、楽しそうに部屋を出て行った。

そんな彼を私は布団の隙間からそつと眺めながら、何だか羨ましく感じていた。まるで自分が悩んでいた事がとても馬鹿馬鹿しい悩みであつて、彼の感じている今の幸せに同調して生活していれば何の問題があるわけでもなく淡々とした日々がこれからも過ぎていくだろう。大した幸せがない代わりに大きな不幸が訪れる事なくこのまま過ごしていけるのではないだろうか。だとすれば、いったい自分は何に対して思い悩んでいたのかさえ段々と分からなくなってくる。けれど、こんな事を彼と出会って以来20年近くもの間、何度も何度も繰り返し感じながら、落ち込んだり、悩んだり、ある時は彼から浴びる罵声に耐え忍びながら、一人そつと肩を震わせて泣いてみたと思えば、あつけらかとした彼のその後の態度についてい乗せられては忘れてみたり。何を幸せで何を不幸と呼ぶのか。自分の判断で幸か不幸か判断する事さえ出来なくなっている自分に何となく無力感の様な諦めにも似たものを感じていた。

欲望

「本当にいい景色だなあ。」

眠りが足りなかった私は不機嫌なうえ、彼から聞こえてくる声に、いつもになく無関心だ。にも関わらず彼は不思議とご機嫌だった。ご機嫌な割に彼は私の反応をさほど気に掛けるわけでもなく、まるで自分だけが景色を満喫している様だ。そんな感覚的ズレのようなものが眠りの不足している私の頭に嫌な感覚として襲ってくる。まだ。

無関心を装う私ではあったが、車窓から見える景色が何ともいえず懐かしいのと同時に、私の中にある無力感の様なものが必要以上に流れていく景色を自分の心の中に吸い込んできて、実はたまらないほどその景色を愛おしく感じていた。

宿泊先のホテルから車を走らせながら、私達家族は夫の飛び立つ空港へと向かった。

昨夜眺めた白亜の灯台が断崖の上にそびえ立ったまま、私たちの行く末を背後から見守っている。

南端の岬から幾つものカーブを越えながら、吸い込まれそうな景色に圧され、窓越しに見るのはもったいない気がして、私は思わず全開に開いた車窓から首を少し押し出したまま、うっとり眺めると言うよりは、むしろ目をギラギラと輝かせながら、まるで自分の脳裏に焼き付けるかのようにまじまじとその景色に見入っていた。

青草に覆われた丘が夏の陽射しを浴びながら、何とも言い様のない美しすぎる程に鮮やかな色を放っていた。そのグリーン色のまだらさがまた一段と不思議な美しさを放ち、ブルーに輝いている海の色と見事な程の調和を保っている。

晴天に恵まれた海は、そこから続く空の青と見事な程に溶け合っていて境い目の見えない水平線を探すのに思わず私は目を凝らしていた。

「あ、またいた。ほらほら、馬！」

後ろの座席から8歳になる息子の和哉が少し弾んだ声で叫んだ。

「あつ、またいた。見て見て！あそこあそこ！」

一つ年上の娘の真美も突然甲高い声をあげた。

旅の疲れからか朝からいつにもなくボンヤリと肩を並べたまま、珍しく黙って座っていた二人だったが、これで見納めとばかり息を吹き返したかのように突然はしゃぎ始めた。

「この辺で写真でも撮るとするか。」

カーブを曲がり終えた先で彼は車を停車させ、子供達に交じって軽やかな足取りで車を降り立った。

助手席にまつたりと座って景色を堪能していた私は、ひっそりと自分の心に余韻を残したまま一人取り残された様なテンポでゆっくりと車を降りる。

視線の先には、早くも丘を駆け登っていく子供達に交じりカメラを片手に嬉しそうに後をつけていく彼の大きな背中が私の視界に入り込んできて、いつものように私の事など振り向きもしない彼が、とてつもなく大きな子供のように思えてくる。そして美しい景色の余韻が私の心の中から少しずつ薄れていく感覚。

急ぎ足で追いつく気力もなくゆっくりと後をついていくと、立ち止まって何やら物珍しそうに丘の斜面の途中で三人がガヤガヤと騒ぎたてながら何やら覗き込んでいた。

「お母さん、骨。」

気の小さい息子の和哉は、すごく神妙な顔をしていて、眉間にしわを寄せたまま、まじまじとその骨に見入りながらも若干足がすくんで半歩ほど後ろへ引き下がったまま動けないでいた。

「大丈夫よ、和君。馬の骨なんだから。そうでしょ、お母さん？」
すっかり物で気の強い娘は、まるで物怖じしている弟をかばうかの様に長い睫毛をぱちぱちさせながら私に同意を求めてきた。

その二人の表情を見ていたら、なんだか小さな幸せに包まれてい

るような優しい気持ちで押し寄せてきて、子供達の事を心から愛おしいと思えてきて、今までのあれこれを吹き飛ばすかのように全てを忘れられるような気にさえなる。

かわいい。単純だがその一言に尽きるな、とそんな思いで子どもたちの顔をまじまじと見つめていたら、返事を催促されてしまった。

「そうなんでしょう。そうだよねえ、馬の骨でしょ？」

強がっていた娘の真実も、ちょっと不安そうな顔をしていた。そんな神妙な二人の顔つきがまた可愛くもあり、おかしくもあり、私は頬を緩めて答えた。

「そうよ。昨日も見ただしよ。これが本物の馬の骨よ。」

この岬に生息する野生馬は、この美しい自然の中で生まれ育ち、やがてはこうして自然に返っていくのだ。その屍を子供たちと並んでまじまじと見つめながら、私もいつかはこんな姿になるのかなあ、とただ漠然と考えていた。頭蓋骨はしっかりと原型を留めた状態ではあったが肋骨や脚の骨と思われる部分は節々から離れ、丘の中腹の斜面が白骨化した馬の魂をすっかりと吸い込み、まるでその骨までも覆い隠そうとしているかの様に朝日を浴びた茶色の土が所々まばらにまわりついている。周辺に生える草木だけがひっそりとそれを見つめていたに違いない。

私はそこに横たわり、ひっそりと息を引き取っていった馬の姿を思い浮かべる。

幸せな生涯だったのだろうか？

思い残す事無く最後のその時を迎えられたのだろうか？

息を引き取る瞬間を見守ってくれた仲間がいたのだろうか？

悲しんでくれた仲間がいたのだろうか？

野生馬を誇る美しく逞しい肉体が、自然の風雨にさらされながら少しずつ削られ、やがて肉も皮も失い白い骨となるまで、その魂は何を感じたのだろうか。それとも、抜け殻から抜け出した魂は、その痛みも苦しみも悲しみも孤独も幸せも喜びも、そして人生を生き抜き何かを成し遂げたという満足感さえも感じることはないのか。

たとえそうだとしても、せめて私が死んで行くその瞬間には、そんな満足感到満たされていたい。

そして私がいつか死んでゆく時、憐みや同情の涙なんかいらないうただひたすら激しい愛情で誰かに愛されていたい。そしてその愛しい誰かが死んでゆく時には魂を揺さぶる程の激しい悲しみに埋もれながら、ただただ祈り続けていたい…

そんな強い欲望的感覚が私の心に突然として襲いかかってきた。初めて感じる感覚だった。そしてこの時の体が震える様な感覚を私はこの後、いつまでもいつまでも忘れられずにいた。

諦め

宿泊先のホテルから車を走らせる事数時間。私たちを乗せたレンタカーは、うねる様なカーブを幾つも幾つも乗り越えながら、眠気で半分意識朦朧としている私の頭を、何度も何度もフワフワとクラクラと縦や横に揺らしながら、連なる山々を幾つも越えながら、夫の飛び立つ空港へとしだいに近付いていった。

その間、一体どれ位の時間が経過していったのか、全く見当も付かない程に私は猛烈な眠気に襲われていた。

後部座席に座る子供達も数日続いた旅の疲れと、どこまでも続くカーブの連続に酔わされて半分眠るようにグッタリとしていた。

「またか」

時折、彼の溜息と、イラついた声が小さくも大きくもないボリュームで、助手席に座る私の右耳に押し込むような低めのトーンで入ってくる。

そのたびにふと目を開けて適当な会話を交わす。

「すごい道ね」

彼のご機嫌を損ねない様に、適当な相槌。

眠気で気のある会話など出来様もない。

いや、たとえばつきりと目覚めていたって、いつも私たち夫婦の会話などこんな感じ。

どこまでも続く山道は思っていた以上に険しく、しかも度重なった台風のお陰で崖崩れの工事があちこちの通り道を塞いでおり、必然的に回り道。

しかもかなりの山道。

いや、獣道？

崖に面した車幅ほどの道を対向車が来ない事を願う様に、彼は一人、不機嫌そうな顔をして黙々と運転していた。

いつの間にか、車内は彼の吸う煙草の臭いでいっぱいになっていた。

吸殻でいっぱいになっている灰皿の中に、さらに重ねて吸殻を押し込むように詰め込みながら横目でちらりと私の方向へ横顔を向け左手で灰皿のボードを閉じる。

半開き。

はみ出した吸殻から再び嫌な臭いが流れてくるなんてたまらない。私は黙ったまま灰皿を力一杯に閉じた。

（ちゃんと閉める！）

心の中で大きく叫んだ声が、誰もいない自分だけのトンネルの中でさらに大きく響き渡り、私の心に響き返ってきた。

何で言えないんだろ。

彼に対する遠慮？気兼ね？

いや違うだろう。

きっとそれは彼に対する諦めだ。

何で諦めるのか。夫婦なのに。

何で… 何で…

きっと私は疲れているんだ。

彼と話をすることに。

言えばきっと彼はますます不機嫌になるだろう。言わなくなつて分かつている。夫婦だから。

彼はその後、黙ったまま黙々とうんざり気の顔でハンドルを右に左に回していた。

いつもはパツチリとした大きな目を虚ろにしながら、長くて太い立派な睫毛の並んだ瞼を時々半閉じにして瞬きし、眉間に薄いシワを寄せ、不機嫌そうな疲れた表情でカーブの先に視線を置いていた。

私はそんな彼を愛情の消えた眼差しでまじまじと見つめていた。

歳を重ねる毎に彼の額は、わずかずつ面積を増してきている様だ。その額の生え際から伸びる彼のもさもさと整わない髪を、思わず観察してしまった。

天然ががった黒髪はまだ白髪を一本も持たず、相変わらず太くて固そうだ。

ちらほらと最近白髪の見え始めた私の髪が妙に不憫に思えてくる。彼は苦労など感じた事があるのだろうか？

そんな疑問が押し寄せてきた。

結婚前まで母親に不満なく世話をやいてもらい、たいした苦労を感じることなく、一人寂しい夜を過ごす事もなく、きっと彼なりに幸せな空間に満たされてきた。

こんな気の利かぬ嫁を貰い、きっと彼は温かった母と比べながら、自分の不満を募らせている。

私に感謝した事などあつただろうか。

心を込めて選んだ誕生祝いのセーターもサイズが合わないと言つてダダをこね、不貞腐れる子供から全く可愛げを奪って歳を加えた顔つきで私に当たり散らして怒った。

空腹で帰宅し、食事の支度が間に合わなかった私に甲高い声で怒鳴りつけた。

仕事に疲れた私が溜息を漏らせば、嫌悪感を抱いた途轍もなく冷

たく嫌気のさした顔で罵倒してくる。

風邪でもひこうものなら、彼なりの配慮なのか怒りはしないもの
のかなり不機嫌。

そんなこんなのアレこれが、幾つも幾つも私の頭に思い浮かんで
きて、悶々としたいたたまれない思いで胸がいつぱいになる。

これがいつも私の気持ちを憂鬱感で満たしてしまい、幸せなんか
感じる暇もないほどだ。

彼はいつも自分を守る事で精一杯だ。

彼はいつも自分の気持ちを発散させる事で精一杯だ。

結婚してからの彼が、私を守ってくれた事などあっただろうか。
結婚してからの彼が、私の気持ちを発散させてくれた事などあっ
ただろうか。

そんな疑問に圧されながら無駄な争いをする事に、私はもうすっ
かり疲れてしまった。

そんな実感がつくづくと込み上げてきて、私は再び続くカーブの
揺れに酔いながら、重たい気持ちに潰される様に眠気に誘われるま
ま遠慮なく眠りの続きに落ちていった。

夢のかげら

連なるカーブに車体を揺らされながら、さらに砂利道からタイヤを伝わってくる振動が、疲れきっていた私を深い深い眠りの底に突き落としながら、夢の中…

私は何ともモワモワとした様な感覚の中で、昔の記憶を呼び覚ます様な形のない夢を見ていた…

太平洋に面した小さく素朴な田舎町の風景―

海辺の松林や、白い浜木綿、港のフェリー、連なる山々、川のせせらぎ―

幼少時代の記憶―

通り過ぎた故郷の風景―

あの頃に感じていた孤独や不安―

いろいろな景色や感情が交差した、言葉では表現できないような複雑な夢の中で、あの頃、幸せな感情を求め続け、探し続けていた自分を少しずつ、けれど激しく思い起こし始めていた。

そう。

私は六人もいる、賑やかなはずの家庭で生まれ育った。

けれど、いつも私を包んでいたのは孤独。

なんとなく夢のない退屈な生活。

？窮屈な生活。

祖父母と同居していた私達家族は、賑やかで明るいと言う表現

には程遠く、いつも聞こえてくる争いの声や、母からの小言…

そんな不愉快な雑音でいつも家中が充ち溢れ、それが騒音と化して幼い私の心押し潰す様に暗闇のトンネル奥深くへと導かれていく様な毎日だった。

楽しいとか、嬉しいとか、そんな気持ちで過ごした思い出が殆どなくて、いつもいつも何かみちたりない様な空腹な気持ちで子供時代を過ごして来たような気がする。

同居している祖父母との折り合いが悪く、養子として入った父はいつも不機嫌そうな顔をしていて母との口論も絶えず、板挟みになった母は、そんなストレスの刃を子供の私たちに向けるかの様にキーンと甲高い声で子供の私たちを支配していた。

そして、一つ下の妹の事を私はいつも複雑な気持ちで眺めていた。たった一人の妹、加奈子。かわいくて仕方ない。

でも、彼女は家の外で殆ど口を開く事のない大人しい子だった。必要以上に大人しく、いつも周りの同級生からはイジメの標的にされていた。

そんな妹の事を私はいつも必死で守りながら齒がゆい思いでいっぱいだった。

そして、私はいつしか妹の事を、口うるさかった母と同様に責め立てるようになっていた。

「何で言えないと？」

「何でちゃんと言えんと？」

「何でちゃんと言わんと？」

「ちゃんと言いない！」

「早く言いない！」

そんな言葉の連発に、いつも妹は苦痛に満ちた表情を浮かべ、顔が硬直していた。

かわいいがゆえに、必死で投げた言葉が、妹の心をますます閉ざしてしまっただろうか。

加奈子が10歳になる頃には、とうとう唯一のケンカ相手であり、

遊び相手であった私にもすっかり心を閉ざしてしまい、家の中では見せていた笑顔さえもついには見る事が出来なくなってしまった。家の中はますます暗くなり、私の小さな心は孤独でいっぱいになった。

母が私を支配していた様に、私も加奈子を支配してしまった。そして加奈子の心を潰してしまった。母が私の心を潰してきた様に。そして、家中の誰もが孤独になってしまった…

私の中で、幸せのかたちが、いつも漠然としていて、自分は幸せなのか、だいたい幸せというものが一体何なのか分らないまま随分と長い時を過ごしてきた様だ。そして、その疑問は今も消える事なく、私の中の孤独がその答えを求め続けている。今も。そしてきつとこれからも。

だから私は、ずっと、ずっと、分らないままでいる。

自分はいつたい幸せなのか、幸せでないのか。

もしかすると幸せに気付いていないだけなのか。

だとしたら、だとすれば、人生なんて大して面白いものではないと証明してしまう様なもの。

それとも、もしかすると幸せでない自分の日常が当たり前になっってしまったがゆえに不幸な自分に気付いていないだけなのか。

だとしたら、だとすれば、幸せな生活が訪れた時、いつたい自分の気持ちがいかにだけみだされるのだろう。

知りたい…

知りたい…

幸せになりたい…

孤独な子供時代の自分が、みだされたい気持ちを抱えながら、二階の窓から遠くに見える夜の港を眺めていた。

暗い海の上を、漁船が小さな光を浮かべて漂っている。まるで、海に浮かぶ星屑のようだ。

その上に散りばめた空の星と一体になりながら、私の気持ちを一段と物悲しい思いにさせながら、見慣れた懐かしい景色とあの頃の物悲しさが私の中へと押し寄せてくる。

あの頃の景色。

あの頃の気持ち。

目頭が熱くなり涙がこぼれそうになる。

故郷を離れ、私は高校卒業と同時に一人家を出た。

家を離れて都会に行けば、そこにはもしかすると幸せが待っているかもしれないと思っていた。

大きな期待と不安で胸がいっぱいになり、一人乗り込んだ電車の中で溢れる涙が故郷の景色を消していった。そつと… そつと…

ふと気付いて目を開けると、車窓から見える景色がかすんでみえた。涙で濡れていた。

あの頃感じていたものがすっかりと自分の胸の内に甦った状態で夢から覚めた感覚。

視界にはすでに夫の飛び立つ空港が見えていた。

そこで私の両親とも久し振りに再開する。もうじきだ。

フェニックスの並木が南国のムードを盛り立てるかのように、心地よく風になびきながら私たちを迎えてくれていた。

これで旅も終わった。

いや。これからまた新しい旅が始まる。

2泊3日の九州旅行を終え仕事の為に帰宅する夫と離れ、空港で出迎える両親と共に、これから私は子供たちと久しぶりに実家へ向かう予定になっていた。

私はすっかり夢から覚めていた。

終わったな。始まるな。

そんな気持ちに包まれながら、私たちを乗せた車はようやく空港へと到着した。

チャンス

山道が長かったせいか体がなんだかフワフワとしていた。

私たちは借りていたレンタカーの返却を済ませ、重たいカバンを抱えながら故郷の両親が待つ空港のロビーへと向かった。

車を降り立った瞬間、真夏のむんむんとした空気が突然と襲いかかってきて車中での仮眠が随分と夕べの睡眠不足を解消してくれたと思っていたが、忘れかけていた疲労感が再び私の体に舞い戻ってきた。

ながい夢から目覚めた様な気だるい感じが私の気持ちの中にドンと座り込んでいる。けれど、現実を見据えたうえで目覚めを感じてしまうと、時間の経過が以外と自分の気持ちをスッキリとさせてくれたりするものだ。まさに今の自分がそういう状況にあることに気付くまで、ここからそんなに長い時間は必要なかった。

見慣れたはずの故郷の景色がなぜだか新鮮に感じるのは、そんな自分の心境の変化が呼び起こしたもののか、それとも今回の帰郷が久しぶりだったせいだろうか。

四六時中共に過ごした夫と久しぶりに離れ、私の両親とは二年ぶりの再開。

きつと変わってないんだろうな……

久しぶりに会う両親の事が、ほんの少し気になり始めていた。

「ちょっとお母さん、お手洗いに行ってくるからね」

「あ、私も、行く行く！」

「僕も！」

久しぶりの祖父母との再会を子供達は楽しみにしている。弾んだ声で嬉しそうに後を追いかけてきた。

「ちょっと一服してくるよ」

そんな子供たちとは対照的に夫は疲れ切った表情でニコチン切れのイラついた顔をしていた。

いつも見せる夫のこの表情に触れる度、私はいつも気を使って使って、使い続けてきた。

この不愉快で憂鬱な緊張感から解放され、しばらくは安心して羽を伸ばせる。

そんな小さな喜びの様なものが、体の内側から打ち寄せてきた。決して好きではなかった両親。実家に滞在して時を共に過ごせば又うるさい小言が飛んできて、いつまでも私のことを子供扱いしてくる父、母の事が疎ましく思えるのは容易に想像がつく事だった。しかし、それでも今の自分はこの男としばらく離れて過ごせる事に大きな解放感を覚えずにはいられなかった。

この数日間、夫は大好きな温泉にのんびりと浸かり、九州の大自然を満喫し、かわいい子供たちと、夫婦仲の最後の修復チャンスを狙っていつもより優しく丁寧に接していた妻の私に囲まれ、楽しい夏のひと時を過ごしながら上機嫌だった。自分の思いが満たされていれば子供の様に無邪気な顔をしながら嬉しそうに大きな声で笑い、面白くもない冗談を並べ、白けて笑えもしない私の反応など気にもせず、自分の言葉だけに一人満足して嬉しそうに時を過ごしてきた。いつものことだ。夫の思いが叶ってさえいれば、私たち夫婦には何のわだかまりもない。

しかし、楽しかったひと時を終え、これから一人帰宅の途につき、明日からの仕事の再開に向けて、きっと彼は気をすり減らし始めている。彼の感じている憂鬱感やイライラが長年寄り添ってきた私にはしっかりと伝わってくる。ここで私の態度や言葉が少しでも彼の気に触れば私は自分を不幸のどん底へと突き落としてしまう破目になる。もう真つ平だ！そして昨夜の諦めが再び自分の中に蘇っていた。

そんな危険にさらされているより、口うるさくとも、多少は血の通い情の通った両親の元でしばらく離れて過ごす事の方が、今の私

にはよほど幸せに感じられる。そう思うと、なんだか久し振りの再開もちよっぴり嬉しく思えてきた。

入口から最短距離の化粧室へと足早に向かい、用を済ませると大きな鏡に映った自分の姿を再開前に思わずチェックする。

結婚・妊娠・出産…そして子育て真っ最中。そんな歳を重ねた娘が一体両親の眼にはどんな風に映るのだろう。ふと少し気になった。出産や子育てで私は仕事を諦め、すっかりキャリアも失った。経済的余裕はもはやなく、自分の為に使うお金も時間も失っていた。帰省に先立ち、子供達の着替えは何とか少し買い足したが、自分のおしゃれにまで気を使う金銭的余裕も、時間的余裕もなくこの日を迎えていた。

タンスの奥から一番お気に入りの若干派手目なＴシャツを選んで着てきたものの、出入りしてくる他の女性のきれいに厚塗りされたメイクや高価そうな手持ちの靴やヒール。それに質感の良さそうなブラウスやスカートが何故だか今日はふと目について気になる。

鏡に映し出されている自分の姿が何だか急に惨めに思えてきて、また少し老けたかなと改めて実感している自分がそこにいた。

じんわりと背中中にじんんでいた汗が、ロビー内の冷房に冷やされ、背中のＴシャツが冷たく貼り付いていた。

安物のファンデーションはすっかりはげ落ちたような状態で、隠したつもりだった頬に散らばるシミが一段と鏡を見つめていた私をうんざりとさせた。うんざりついでに思わず顔を鏡から数センチほどの距離まで近付けまじまじと見てしまった。張りを失いたるみがちになってきた皮膚に、はがれおちた化粧が筋になっていて、そのさまが余りに歳を取った自分を感じさせ、愕然。

一重で腫れぼったい瞼は寝不足のせいか益々むくんでオマケ二重。久しぶりにじっくりと眺めた自分の姿にこれほどまでにガッカリするなんて。

うんざり… うんざり…

今まで私は一体何をしていたのだろうか。言い様もない虚しさの様なものが込み上げてきて、自分の生き方を変えてみたいという思いが再び私の中に沸々と湧き上がっていた。

これじゃあ恥ずかしくて、せつかく久し振りに帰省しても同級生にも会えないな。

反省の様な、諦めの様な、後悔の様な、そんなすつかりと虚しい感覚に陥っていた。

『時間を作るいい機会だったのかな。これが。』

心の眩きようだった。

久し振りの帰省は、環境を変えて自分を見つめ直す為のいいチャンスになるかも。

私はそう気持ちを切り替え、せつかくの再開に期待を寄せながら、素早く手元にあった安物のファンデーションを顔に塗りつけると、子供たちと共に待ちわびているであろう両親の姿を捜す為、化粧室を後にした。

祈り（前書き）

長い間、仕事に追われ執筆を休止していましたが、やはりこの小説だけは書いてみたい。そんな思いに駆り立てられて書くことにしました。最後まで。初めての小説ですが、どうしても書きあげたい。

祈り

空港のロビーに落ち着きのない視線で周囲を見渡しながら、待ち侘びたように佇んでいる老夫婦の姿が眼に飛び込んできた。次の瞬間、私はそれが自分の両親である事を悟るやいなや愕然としてしまった。唐突な言い方をしてしまえば、二人とも一気に老け込んでいた。時が流れてきたことへ対する虚しさが一気に私の体中を包み込んでいく気がした。

会わずに過ごした二年という歳月を、これ程までに大きく感じたのは初めてだ。

見慣れたはずの両親の背中をこれ程までに小さく感じたのも初めてだ。

そんなこんなであれこれが私の心を駆け巡り、一体どんな顔をしてどんな最初の一言をこの両親に与えるべきなのか、かける言葉が思い当らずに心のなかでモジモジとしてしまった。

そんな両親と久々に交えた視線は、かつて威厳のあった父や母の顔からは想像もつかないほど柔らかく、その柔らかさにまたまた物悲しい様な感覚を覚えずにはいらなかった。優しくなったと言うよりは、むしろ人として年老いた弱さのようなものを何だか見せつけられているような気がして、優しそうな表情を見せながら近づいてくる両親から、懐かしさや安心感よりは、むしろ哀れさのようなものが漂ってくるのを感じていた。

空港の人混みの中で口べたな夫は、ぎこちなくも自分なりに精一杯の愛想笑いを浮かべ、久し振りに会った私の両親に一通りの挨拶をすませた。そそくさと搭乗手続きを済ませ、家路につくそんな夫の背中を、私は別れを惜しんでいる子供達に不自然に交わりながらそっと見送った。

すでに夕暮れが差し迫っていた。私は残された子供達と共に、父母の自家用車へと乗り込み、懐かしい風景をまじまじと眼で追いながら実家までの道のりをたどっていた。

再開までに感じていた昼間の高揚感が少しずつ自分の中でダウンしていく。そして孤独に包まれながら過ごしたはずの故郷の風景が何故だか今の私の心には温かく沁みこんでくる。楽しく過ごした思い出もないのに…

辛くて苦しい思い出ばかりがいつも私にのしかかり、離れたくても忘れたくても、逃げ出したくても…ようやく辿り着いたのが今のはずだった。

その今がみたされていない。何にみたされていないのか。それさえもよく分らないけれど、逃げ出してきた故郷という地点が今温かく感じられるのは何故か。結局、幸せな感覚というものは、その地点に身を置いていると気付けないだけなのか。

だとすれば、幸せになるために、今の自分を取り巻く様々な環境や、人々やすべての物事に対してもっと感謝しなければならぬのかもしれない。

だとすれば、もっと夫に対しても感謝しなければならないだろう。けれど、愛情のない夫に感謝することは今の私にとってはかなり困難だ。私が再び夫への愛情を感じない限り幸せの扉をくぐり抜けず、いつまでもいつまでもそこへたどり着けない様な感覚に包まれながら、この先の人生もずっとずっとこうして過ごしていくのだろうか。

けれど、もしも夫という存在が自分の生活している空間から排除されてしまえば、その必要が消えてなくなるわけで、ここ数日の間にその具体的方法についてすでに自分の中で模索し始めていた。しかし、そんな冷淡な考えに至ってしまう自分に途轍もなく大きな嫌悪感と罪悪感を感じつつ、ちよっぴりそんな夫にもう一度感謝してみる方法についても模索してみたが、ここまで情が冷めてしまっていてはもはや不可能だという思いが何度も何度も自分の心に押し寄

せてきては自分を責め立て、そして自分のわがままさにうんざり。
いや、どうしたらいいのだろう…

空港から続く実家までの見慣れた道のりは、本当に懐かしい。フ
エニックスの並木が続く海岸線をひた走りながら海や空を眺めてい
ると故郷で過ごしていた子供時代の自分の感覚が体の底から蘇って
くる。悲しかった思いも、寂しかった思いも、苦しかった思いも、
多感な思春期に感じていた複雑なあの頃の心境も、すべてが愛おし
く思い出されてきて、懐かしい景色とそんな思いとが溶け合い、融
合して、なぜか表現しきれないほどの儚さのようなものが自分の胸
の内でざわめいてくる。

青く輝いていた海も空もすっかり夕暮れ時の色合いへと変色しつ
つ、傾き始めた夏の太陽がムンと香ってくる潮の香と共に私達を乗
せた白い軽自動車をいつまでも追いかけてくる。

もともと口数の少ない両親と、疲れも伴い久し振りの再開にやや
遠慮がちに座っている子供達のぽつりぽつりと時々交わす会話が実
家までの距離を一段と遠く感じさせる。

そんなふうには二時間ほど走り続けていると、ようやく実家のある
田舎町へと入っていた。

懐かしさが一段と増してくる風景だ。港町を見下ろすように古い
橋を通り越すと、夕暮れの海に漁船が小さく並んで見えてくる。私
たちを乗せた乗用車が、すぐその先のカーブを曲がると一瞬にして
その景色が打ち消され、流れ込むように、うつそうと茂る草木に包
まれた風景が山を切り立った車道の両端にしばらく続き、そしてゆ
るやかにうねっている細い道をしばらく走るとまたすぐ右手に海岸
が広がって見えてきた。そして何故かその先に小さく見える岬の白
い灯台をいやに懐かしく感じながら、昨夜眺めた灯台の光が私の脳
裏に焼き付いていてやけに物悲しい感触を受けていた。

「灯台が見えてきたねえ」

長旅で疲れきったみんなの沈黙を破るように母がポツリと言葉を發した。

「おばちゃんの事を覚えとるかね？」

揺れている小さな車の助手席に座り、後ろの座席に子供たちと窮屈そうに座っている私の方を振り向くわけでもなく、誰に向けて尋ねているのか一瞬戸惑うが、私以外誰も質問の意図をつかめる者がいない事にふと気付き、あわてて尋ね返した。

「おばちゃんて？」

「ほら、美智子おばちゃんのことよ」

前方を向いたまま灯台の方向へ少し顔を向けて揺れている母の頭は珍しくやけに黒かった。若い頃から白髪の多かった母はいつも大事な行事の前になると必ず毛染めをしていた。私たちの久し振りの帰省に合わせ、きつと母なりのおしゃれをしたつもりなんだろう。

昔は、しばらくして色が抜けてくると、目立ち始めた白髪を気にしてよく子供の私に抜いて欲しいとせがんだものだ。そんなあの頃の思い出と共に、美智子おばちゃんの顔が私の記憶にはつきりと蘇ってきた。

美智子おばちゃんというのは、母の従妹の事だ。子供の頃から母とは随分と仲が良かったようだが四国へ嫁いで行つてからはめつきり会う機会も少なくなってしまったようだった。それでも私が子供の頃に2、3度家へ泊まりに来たことがあつて、とても印象深い女性だったので、まだ子供だった私の記憶に鮮明に残っている。色白で背が高く、子供だった私にすら女性の魅力を感じさせる様な氣品に満ちた人だった。品の良い話し方。何気なく身につけている洋服も靴や鞄にさえも嫌味のない品が漂っていた。熱烈な恋愛の末に外科医と結婚し、裕福で不自由のない生活を送つてはいたが、度重なるご主人の浮氣に再三悩まされ、長年の別居生活の末に晩年は肝臓癌を患い50代の若さで亡くなったと聞いていた。私が帰省する度に、母はいつもおばさんの話題を持ち出してはいくら金に不自由のない裕福な生活をしていてもあれでは可哀そうなどと何度も何度も

話題にあげてはしきりに話をしていた。憐みなのかただの好奇心だったのか、母がいつも話題にあげてはしきりに娘である私に問いかけるように話をしていたおばさんの事が妙に懐かしく思えてきた。母があのおばさんに憐みを感じていたのだとすれば、裕福でもなく、さらに愛情もないみちたりない毎日を送っている私の生活を一体今の母だったらどう感じるのだろうか。そんな事をぼんやりと考えながら、ぽつりぽつりと母の話が海辺に沿って走るゆるやかなカーブをいくつもいくつも通り越しながら続いた。

晩年床に臥せながら、おばさんはいつも生まれ育った故郷の海を想い、「私が死んだら遺骨を日向の海に散骨して欲しい」と自分の息子達に懇願していた。そんなおばさんの願いを受け、遺骨を抱えて今年の春に、二人の息子が突然母を訪ねて来たらしい。母は地元漁師に頼んで小さな魚船を岬の小さな白い灯台まで出してもらったとのことだった。

「あの灯台の下に眠ってるよ」

母の声は潤んでいた。細めた目尻にはくつきりと深い皺が横たわっていた。両手を合わせ祈りを捧げている母を後ろの座席からひっそりと眺めながら、言いようもない羨ましが胸の内に込み上げてきて、自分の未来もそうでありたいと、母の合わせた手の中に、ひっそりと自分の祈りとして捧げている自分に気づいた。そうだ。私もこの海の底でいつかひっそりと眠りたい。夫と同じツメタイツメタイ墓石の下で眠り続けるなんて、絶対に嫌だ。いつか私が死んで白い白い骨になったら、この海の底でひっそりと愛する人の事を想いながら永遠に眠り続けたい……そんな欲望に駆り立てられながら帰省した故郷での夏はあつという間に通り過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1126e/>

～ 祈り～ みちたりない幸せ

2010年10月28日07時22分発行